

【学府教育目標】 『ふるさとを愛し 互いを認め 未来をともに創る子』の育成

【校訓】 強く 正しく 美しく

【学びづくり部重点目標】 基礎・基本を身に付け、「わかった」を実感する子

【研究主題】「じりつ」した学び手～子どもが進んで学びをみがく～

2 主題設定の理由

(1) 学校教育目標・児童の実態から

学校教育目標「『ふるさとを愛し 互いを認め 未来をともに創る子』の育成」には、一人一人が自ら考え、夢や希望をもちながら様々な体験活動やかかわり（学年間、異学年、地域）の中で仲間と競い合ったり、共に励まし合ったりしながら、自己と共に他者を認めながら生きる人間に育ってほしいという願いが込められている。よって「じりつ（自立・自律）と共生」という2つの視点を踏まえた目標となっている。

本校の子どもたちは、教師や親などの大人から指示されたことに対しては素直に取り組む子が多い。また、「できそうだ」「このやり方でやってみたい」と見通しをもてたことに対しては、前向きに取り組むことができる。しかし、失敗を恐れて自分から取り組むことに対しては消極的である。たとえ取り組んだとしても、思うような成果が得られないと諦めてしまい、次の課題に向かう意欲を持続できないという課題もある。

そのため、特に学習においては、子ども自ら興味があることを見付けて取り組んだり、課題に対してどうしたら解決できるか見通しをもったり、解決に向けて諦めずに学ぶ力を育てていくことが重要である。そして、子どもたちが、このような力を身に付けることで、学習が単なる知識の習得に留まらず、生涯にわたって学びを更新し続ける「じりつ」した学び手へと成長していくと考える。

(2) 研究の経過から

本校では、令和4年度から3年間、単元デザインを軸として研究を進めてきた。単元のゴールを明確にして、毎時間つながりのある学習を進めることで、子どもたちが「わかった」「できた」を実感する授業づくりをすることができた。

昨年度は、目指す子ども像を「自ら学びに向かう子ども」とし、そのような子どもを育成するために、研究主題を『「じりつ」した学び手～子どもが自ら学びに向かう～』と設定し、研究に取り組んできた。子どもたちが学ぶ意欲をもち、「わかった」を実感するためには、子ども自ら「学びの選択」をし、その学びを「振り返り、見通す」ことが大切であると捉え、「教師が教える授業」から「子どもが学ぶ授業」への授業観の転換を図った。

昨年度は研究の視点として「学びの選択」と「学びの見通し・振り返り」を設定した。

昨年度の研究から明らかになった成果と課題を以下に示す。

〈子ども〉

- 学びの選択をすることで、自ら学びに向かうことができた。
- 振り返りを継続することで「今日は〇〇をしたい」「こんな風にやってみていいのかな」「次の時間は、〇〇をしたいから〇〇の準備をしよう」などと自分の思いをもって学習に取り組むことができた。
- 授業で学習した内容を家庭学習でさらに調べたり、実生活とのつながりを考え発展的に実験したりするなど、学校外でも意欲的に取り組む姿が見られた。
- △学びの質を高めるための「学びの選択」にならない場面がある。
 - 安易な問いや問題を選んでしまう場面
 - 仲の良い人同士で集まって話をし、話合いが深まらない場面
- △教師の事前準備に頼っている姿がある。
 - 自分の学びを自分でより良くしようとする意識がまだ足りない。

〈教師〉

- 「教える」から「委ねる」「気付かせる」に変化してきている。
- 子どもが学びの選択や今後の見通しがもてるように、環境整備を工夫することができた。
- 自律的に学ぶ方法をパターン化することで、子どもたちが安心して自ら取り組んでいた。
- △子どものやりたいことが、真に学びの質を高めるための選択につながっているのか疑問に思う場合の助言や手立てが難しい。
- △子どもが学びの選択をする際に、学習の目標を達成するための学習内容になっているか確認し、適切な方向を見失わないようにしたい。
- △教師の事前準備が必要であるが、準備しすぎることで子どもたちの「じりつ」の芽を摘んでしまっている場合もある。

昨年度取り組んだ「じりつ」した学び手の育成により、子どもたちは主体的に学習に向かい、自力で課題を遂行する「じりつ」の基礎を身に付けてきた。しかし、子どもの選択が真に学びの質を高めるための選択になっていなかったり、協働する相手が仲の良い友達のみになったりと、課題が残る。他にも、子どもたちは未だに「先生が教えてくれる」のような受け身の意識がある。学びのコントロールは、いつでも自分でしていくという意識の転換も必要である。

以上のことから、本年度は、子どもたちに、自らの学習状況を客観的に捉え、よりよい方法へと改善し続ける「自己調整」の力を育みたい。

令和8年度は研究主題を『「じりつ」した学び手～子どもが進んで学びをみがく～』と設定する。そして、目指す子ども像を「進んで学びをみがく子ども」とし、その具現を目指す。なお、研究主題『「じりつ」した学び手～子どもが進んで学びをみがく～』の「じりつ」には、「自己決定し、自ら学びに向かう」という意味での「自立」と「学びを調整し、諦めないで学び続ける」という意味の「自律」との両方の意味をもたせている。また、「みがく」には「自分の学びをよりよい方向へ磨き上げる」意味をもたせている。「みがく」という言葉を職員のみにも留めず、全校の子どもたちとも共有していきたい。そのため、「じりつ」と「みがく」をあえて平仮名にした。

(3) 研究の内容

本校の児童の実態やこれまでの研修の経過を踏まえ、令和8年度は以下の2点を研究の視点として、研究主題に迫っていく。

研究の視点①【学びの選択・調整】

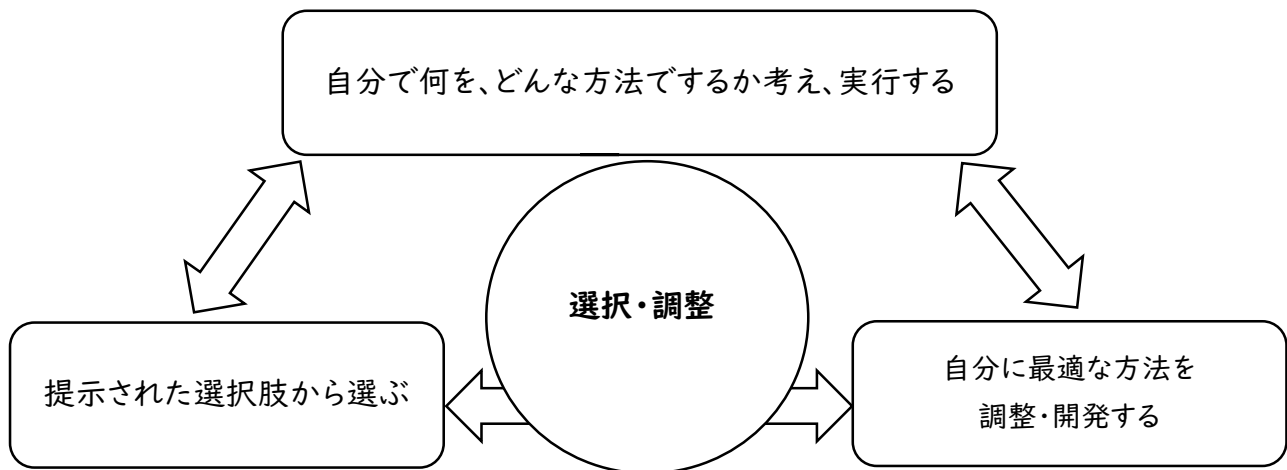
子どもたちは、達成したい目的や願いがあるとき、解決したい問いが生まれたときに、自ら学びを進めようとする。そこで、子どもたちに学ぶ内容の選択が保障されることで、学びが個性化される。また、子どもたちは学びの方法の選択も保障されることで、さらに自ら学びに向かうと考える。

「学びの選択」を子どもの視点から捉えてみると、「内容の選択」と「方法の選択」の2つに区分することができる。

内容の選択 (例)	方法の選択 (例)
<ul style="list-style-type: none">・ 目的を達成するために学ぶ・ 一人一人に生まれた問いの解決・ 学習を定着させるために、自分に必要な問題を選ぶ	<ul style="list-style-type: none">・ 学んだことを一人で振り返る・ タブレットで調べる・ 教科書や辞書を使う・ 友達や教師に分からないことを聞く

「学びの調整」とは、選択をして学びを進める中で、より良い学びを求めて自ら工夫することである。つまり、学びの途中で立ち止まったら前に戻ったりしながら、自分に最適な方法を調整したり開発したりすることである。

【学びの選択・調整 イメージ図】



教師は、子どもに学びの選択を委ねられるように、待つ必要がある。そして、教師が意図をもって「委ねる」「待つ」中で、子どもがどのように学びを進めているか見届けていく。状況によっては、教師が方向付け、指導することで学びの質を高められる場合もあるが、その際は子どもの学びのプロセスを理解したうえで、教師としての出方を考えたい。

※教科によっては、子どもたちが「内容の選択」や「方法の選択」が難しいことも考えられる。

その場合は、教科の特質を生かし、どちらかに重点を当てる。

研究の視点②【学びの見直し・振り返り（メタ認知）】

授業者が子どもの学びを計画する際に「子どもが、何を、どのように学び、何ができるようになるか」という視点が必要である。

同様に、子どもは「何を、どのように学び、何ができるようになりたいか（なったか）」という視点をもって、学びを見通したり振り返ったりする必要がある。つまり「学ぶ内容」と「学ぶ方法」の2つの視点をもって、学びを見通したり振り返ったりすることである。特に、学びを振り返る際には、これまでの学びの選択がより良いものになっていたのか、子どもが客観的に自己評価できるようにしたい。

「学ぶ内容」の振り返りとは、何（知識）を学んだのか、何（技能）ができるようになったかを自覚することである。

学ぶ内容の振り返り（例）何が分かった

- ・ 1 mは 100 c mということが分かった。
- ・ 大造じいさんが、残雪を狙っていたが銃を下した理由が分かった。銃を下したときの大造じいさんの気持ちは〇〇だった。
- ・ マット運動で、目線に気を付けることで前転倒立ができるようになった。

「学ぶ方法」の振り返りとは、どのように（方法）学んだのか、それはどうだったのかを自覚することである。

学ぶ方法の振り返り（例）どのような方法で取り組んだか

- ・ 2時間目に学んだ徳川家康との関連を考えたり、つながりをタブレットで調べたりした。
- ・ 3時間目の1 mが 100 c mということが分からないから友達に聞いてみた。

令和8年度は特に、自分の学びをより良くするために見通したり、振り返ったりすることに焦点を当てていきたい。

学びをもっとよくするために（例）

- ・ さらに江戸時代の徳川家の政策について教科書と資料集を使って調べてみたい。
- ・ タブレットでビデオ撮影して自分の前転の様子を振り返ったやり方がよかったので、次も同じやり方でやりたい。
- ・ 今日はタブレット端末を使って調べたが、情報が多くてよく分からなかったなので、次の時間は、教科書を使って調べることにする。

※振り返りは授業の終わりや単元の途中、終末など適切なタイミングで行うようにする。必ずしも記述ではなく、口頭での振り返りになる場合もある。

以上2点を研究の視点とすることで研究主題に迫り、いずれは、自分で1時間の学びをデザインして学習に取り組むことができるようにしていきたい。

3 研究方法

(1) 研究授業

- ・ 研究推進委員会で指導案検討し、事前に共通理解できる場を設定する。
- ・ 1学期に提案授業1本、2学期に中心授業2本（柔軟に対応）にする。
- ・ 全教員で授業を参観し、全体会に参加する。
- ・ 全体会は、視点に沿って、子どもの姿を語り合い、授業改善につなげる。

(2) 公開授業（一人一授業）

- ・ 希望教科ごと3人組を作る。1年間その3人組で研究（事前研修、授業実践、事後研修）をする。

① 研修教科の希望（第1、第2希望）をとる【全教員】

② 3人組を作る【研修主任】

③ 3人組で授業公開の日程を決め、研究をする

例)社会 7月2週目…A教諭 9月3週目…B教諭 11月2週目…C教諭

例)国語 9月1週目…D教諭 10月2週目…E教諭 11月4週目…F教諭

※なかよし学級の担当は、柔軟にグループを作れるようにする。

※事後研修で話題になった成果と課題をミライムで投稿し、共有できるようにする。

(3) その他

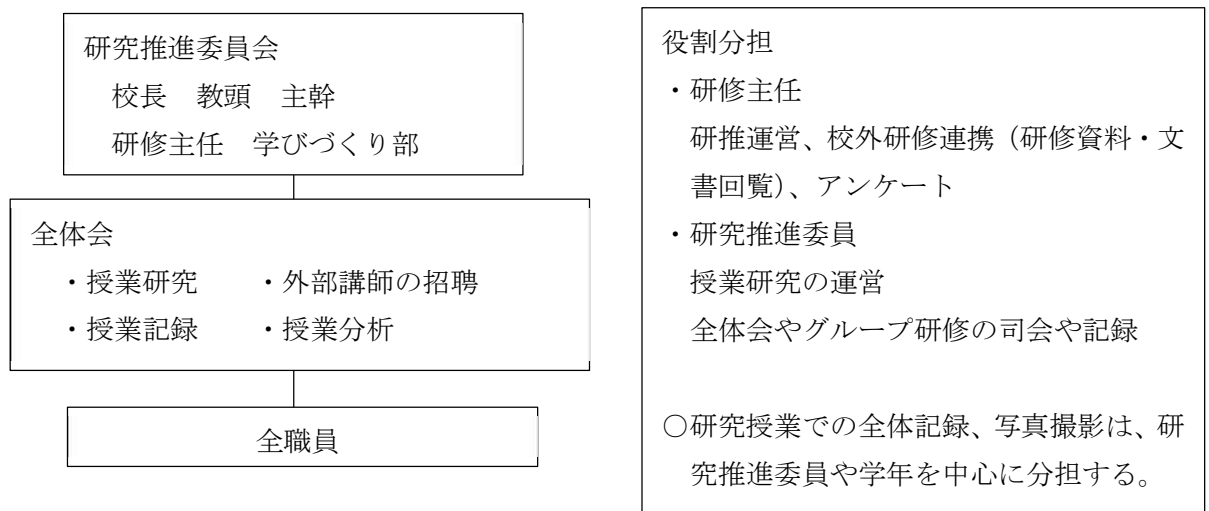
〈指導案について〉

- ・ 授業者が作成し、3人組で検討をする。（事前研修）
- ・ 指導案が完成したら、データをミライムの掲示板で投稿する。

〈一人一授業について〉

- ・ 公開時期ができる限り重ならないように、研修主任が調整をする。
- ・ 公開授業日を週報で（主幹）、ミライムで（研修主任）がアナウンスする。

4 研究組織



5 研究計画

回	日時	形態	内容	形態	内容
1	4/8 (水)	研推	令和8年度研修の概要説明・指導案等の検討		
2	4/15 (水)			全体	令和8年度の研修についての説明
3	6/8 (月)	研推	提案授業についての検討		
4	6/17 (水)			全体	提案授業全体会
5	7/1 (水)	研推	夏の校内研修についての検討と確認		
6	7/31 (金)			全体	夏の校内研修
7	8/28 (金)	研推	2学期の研究推進について		
8	10/9 (金)	研推	第1回研究授業についての検討		
9	10/21 (水)			全体	研究授業全体会
10	11/16 (月)	研推	第2回研究授業についての検討		
11	11/25 (水)			全体	研究授業全体会
12	12/7 (月)	研推	研修アンケート内容検討		
13	12/21 (月)			全体	今年度のまとめ
14	1/18 (月)	研推	R9年度校内研修についての検討①		
15	1/27 (水)			全体	R9年度校内研修についての提案
16	2/8 (月)	研推	R9年度校内研修についての検討②		
17	2/17 (水)			全体	R9年度校内研修についての提案

6 研究構想図



<研究の基盤>

<子どもの実態>R7年度

- 学びの選択をすることで、自ら学びに向かうことができている。
- 振り返りを継続することで、自分の思いをもって学習に取り組むことができている。
- 授業で学習した内容を家庭学習でさらに調べたり、実生活とのつながりを考え発展的に実験したりするなど、学校外でも意欲的に取り組む姿が見られる。
- △学びの質を高めるための「学びの選択」にならない場面がある。
 - 安易な問いや問題を選んでしまう場面
 - 仲の良い人同士で集まって話をし、話合いが深まらない場面
- △教師の事前準備に頼っている姿がある。
 - 自分の学びを自分でより良くしようとする意識がまだ足りない子がいる。